
死地の親友

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死地の親友

【Nコード】

N6188S

【作者名】

さや

【あらすじ】

マッドな研究施設に軟禁された一人の男が、そこで出会ったフラインケンと呼ばれる怪物と友情を育む物語。

（前書き）

少々の残酷描写あり。
苦手な方はご遠慮ください。

ある研究施設内。

食堂にて唐突に暴れだすどこか異様な人間たち。

このまま殺し合いでも始まるうかと言う一触即発のムードを収めたのはフランケンと呼ばれる化け物だった。

壁を殴り自身に視線を注目させ、騒ぎの中心人物をひと睨みしただけで誰もが押し黙った。

それを見届けた彼は何事もなかったかのように黙々と食事をする。

だが、そんな彼に平然と話しかける一人の男がいた。

「よう、隣いいか。」

「……」

フランケンは微動だにしない。

しかし、男はそれを全く気にせずに会話を続ける。

「沈黙は肯定と見なすぜ？」

にしても、ここの飯は美味いよなあ。

「あんたもそう思わないか。」

男を見ぬままフランケンが口を開く。

「……お前はまだ普通の人間だろう。
俺は化け物だぞ、恐ろしくはないのか。」

その問いに男はニヤリと笑った。

「んなこたあ問題じゃないな。
ここにいる奴らをちよつとばかり観察していたんだが、見た目だけは人間のままだ。他の奴らより、あんたの方がよっぽど理性的だし感情も持っている。」

と、俺は判断した。
しかし、見た目に似合わず食べ方はやたら丁寧だな。
どういう奴なのか分からなくなってきた。
さつき、騒動が起こりそうだった時に発揮した腕力と威圧感からは想像つかん。

そりゃあ確かに人間は矛盾した一面を併せ持つのが普通だが、あんたの場合は少々極端すぎる感があるぞ。」

男の軽口にフランケンは眉間に薄くシワを寄せる。

「……ふん。ペラペラとよくしゃべる。」

そもそも、俺を人間と同じと思うことが間違いだ。

色んなもんが混ざりに混ざった化け物に矛盾があって、何もおかしいことはない。」

「ふうん、そんなものか。」

ていうか、フランケンと呼ばれていたのは伊達じゃないんだな。

あんた、本当にそういう存在なんだな。」

そう言って、男はフランケンに好奇の目を向けた。

「…お前は、その相手に対して少々油断しすぎじゃあないか。」

突然、俺が暴れだして『グシャ』なんてことになっても知らんぞ。

「

「何だ、あんたにはそんな事が頻繁にあるのか。」

「いや、1度も無い。」

「って、無いのかよ！…っあー、ガラにも無くツツコンじまったぜ。そんなあるかどうかも分からんことを心配しても仕方が無いだろう。」

それとも、アレか。俺に近寄って欲しくない理由でもあって、ワザと言ってんのか。」

ちらりと視線を男にやるフランケン。

「……………変な奴。」

ここに連れてこられて間もない人間は往々にして騒がしいものだ。この常軌を逸した場所に突然軟禁されて何故そんな風に冷静でいられる。

「お前は一体何なんだ。」

「別に何でもない。ただの人間だよ。何、俺に興味があるのか？ 知りたいか？」

楽しそうに身を乗り出してくる男からフランケンが再び視線を外した。

「…別に。」

どうせ、お前もすぐに他の奴らと同じになる。

それを聞く事に何の意味がある。」

「む…意味か。そうだなあ。」

俺が俺を忘れても、あんたが今の俺を覚えててくれるってのは結構俺にとっては意味のある事かもしれない。

そっというの…、あんたには無いか？」

「さあな、俺はもう行く。そんな事は、他の誰かにでもしゃべればいいだろう。」

退屈してる奴はいくらでもいるんだ。」

フランケンがそう言うとおっさりと席を立った。

それに焦った男は咄嗟に彼の腕を掴んでまくし立てた。

「っ待てよ。まだ時間はある。もう少しいいだろう。」

聞いて欲しいと思ったのはあんただからだ。他の誰かじゃあ意味がない。

それに、明日の俺はもう俺じゃあないかもしれない。…だろ？
な、頼むよ。フランケン。」

「チツ…。くだらんと思っただけに席を立つ。いいな。」

怪訝な顔でのそりと席に戻る彼に男は微笑みを浮かべた。

「ああ、構わない。ありがとう。あんた、見かけによらずいい奴だな。」

「いいから、話すなら早くしろ。俺だって暇じゃない。」

それから男は自分のことを話し始めた。

フリーのカメラマンだったことやごく最近結婚したこと。

それから自分の性格のルーツ、ここに捕まった経緯などを手短かに語った。

おそらく、目の前の化け物は男のそんな話には毛ほども興味は無かったことだろう。

だが、彼は席を立つでもなくただ黙って話を聞いていた。

そうして、ようやく男が一息ついた頃、彼は言った。

「それで、…俺にどうして欲しくてそんなことを話した。」

「だから、別に何がどうってんじゃない。覚えておいてくれればいいのさ。」

俺と言う人間が確かにここにいたという事を。

俺を知っているのが俺だけじゃあ俺は俺である意味が無いんだ。」

「何を言っているのか分かん。」

「だろうなあ。俺も言ってる段々分かんなくなっちゃった。

でも、やっぱあんたに話して良かった気がする。」

「...。」

それから、フランケンは無言で席を立った。

出口で看守のような者に話しかけられて一言二言会話をしていたが、その内容は男の耳には届かない。

看守との会話も終わると彼は食堂から姿を消した。

定められた時刻になり、食堂に残っていた全員が監視カメラ付きの部屋に否応無く放り込まれた。

男は一人一室であることが唯一の救いだと思っていた。

その日の晩、就寝時間をとくに過ぎた真夜中に自分の部屋の前になにやら気配を感じて、男はふとドアへと視線をやった。

ドアは3分の1が鉄格子になっており、確かに誰かがそこにいることを確認した男は 少々警戒をしつつも扉の前に立った。

そこには昼間の彼がいた。

「何だ、フランケンじゃないか。どうした、こんな夜に。それに、…………どうしてあんた外にいる？」

男の問いに、フランケンはいつもの無表情で淡々と答えた。

「俺は、この研究所に飼われている従順なペットだ。実験動物であるお前達の監視と統制、運搬が俺の仕事だ。」

その事実には眉をひそめた男だったが、すぐにいつもの表情に戻った。

「…そう、か。それで、そのあんたが何の用でここに来たんだ。それもこんな時間に。」

「お前を材料とした実験が明日の正午からに決まった。」

告げられた言葉に驚くでもなく、不思議そうな顔をした男は再び彼に問いかける。

「なぜ、それを俺に教える？」

いつものこと…な、わけが無いよな。

それとも、これも実験の一部なのか？」

「違う。…………だが、俺にも分かん。」

俺がなぜ命令も無しにここに来たのか…。」

「へえ。」

「…で、そんな事を伝えて俺が変な気を起こしたらどうするつもりだ？」

「疑わしい行動を起こせば俺は迷わずお前を殺す。

所員達の命令のままにお前のような人間を何人も何人も壊した。

ここでの俺の存在価値を失わないためにな。」

「そうか。…でも、さ。あんたそれでいいのか？」

ここから逃げたいとは思わなかったのか？」

そこでフランケンはいさだけ男から視線をずらした。

「…俺の生きる場所はここにしか無い。

そして、俺の生きる意味もここにしか無い。」

「それが辛くはないのか。」

「…。」

フランケンは答えない。

だが、男にとってそれは答えだった。

「そうか。

……………そうだな。

なあ、フランケン。昼間した俺の話、少しは覚えてるか？」

この問いにもフランケンは答えない。

男は少しだけ嬉しそうに笑んだが、それから徐々に顔を暗くして呟いた。

「……………あゝ。絶対帰るって言っちゃったんだよね、クソ。頼むから、律儀に待ったりしてくれるなよ…。」

そのつぶやき以後、互いに沈黙が続く。

しばらくすると、フランケンは無言のまま闇に消えて行った。男はそんな彼の背を複雑な感情で見つめていた。

翌日、所員とともに再びフランケン は現れた。

一瞬だけ視線を合わせるも、お互い何も言わなかった。

今までの人間と違い大人しすぎる男に所員は多少首を傾げたが、問題なしとして実験室へと運んだ。

実験台の上に拘束され何らかの薬物を投与される直前、男は自嘲の笑みを浮かべた。

と、その瞬間…言葉にならない叫びと共にフランケンが暴れた。た。

部屋を滅茶苦茶に破壊していく彼を見て、その場から慌てふためき逃げ出す所員。

それを尻目にフランケン は男の拘束を解いた。

そして、素早く扉の外を確認して、ある方向を指差しながら男に言った。

「走れ、こっちだ！早く！」

うるたえながらも、フランケンの言うとおりに走る男。

「あんた、どうして…。俺を逃がすつもりなのか？
今まで何人も命令に従うまま壊してきたんだろう。
そうするしか無いと言っていたのはあんたじゃないか。」

フランケン は軽くため息をつきながら答える。

「…そこまで考えてやったんじゃない。
誰かさんのおかげで思い出しちゃったんだよ。
俺も昔は人間だったってことを…。」

くだらん感傷に振り回されてこのざまだ、馬鹿野郎。
「くっ、ははっ。なあ、こうなったら2人でとことん逃げちまおうぜ。」

何、外でのあんたの面倒くらい俺が見てやるよ。
「言ってる。」

フランケンは鼻で笑う。

走りながら男は施設内を見回して問いかけた。

「…なあ。今さら聞くけど、ここは一体何なんだ。」

フランケンが少し黙ったあと、いつもの無表情で答えた。

「ここは生物兵器を開発する為の政府公認の機関だ。表向きには存在しないがね。」

無駄飯食らいの犯罪者たちを化け物に改造して遠くの戦地へ輸出するのだ。

邪魔者は片付くし金も儲かるし、この国の戦力の補強にもなる。

…が、こんな騒ぎが起きたんじゃあ計画も白紙かな。」

「何と言つか…、とんでもない場所だったんだな。」

フランケンは見目と裏腹にとっても頭が切れるらしく、逃げながらも様々な手段を用いて所員たちをかく乱した。

外部の者の侵入や実験対象たちの逃亡を防ぐためのシステムも、その全てを知り尽くしている彼の前に何の役にも立たなかった。

だが、さすがの彼にも予想外の事が起こった。

パニックに陥った一人の所員が施設内の全ロックを解除したことで、化け物がそこかしこに放たれてしまったのである。

悲鳴と血の香りがそこら中から届いた。
化け物も人間も関係なく死んでいった。

「…くそっ、何をやってるんだ！

どうせ、俺は所員を傷つけないようプログラムされてるんだから、
誰にも危険なんか無かったのに。

一体誰がこんな馬鹿なことっ…。」

突然立ち止まって、フランケンはその大きな手で男の目を覆った。

「見るな。」

「え？」

「ここから先は地獄だ。人間のお前に耐えられる光景じゃない。」

男はその言葉に「ぐくり」と唾を飲んだ。

「目をつぶったまま俺におぶされ。

そして、生きてここを出たければ死に物狂いで掴まっているんだ。
化け物がいつどこから襲ってくるか分からん。

離れてしまったら俺とてどうしようもない。」

男は無言で頷いて彼にしっかりとおぶさった。

フランケンは片手で男を押さえ、先へと進む。

監視役だけあって彼の事を疎ましく思っている者も少なくなかつ
たらしく、二人は途中かなりの数の化け物に襲われた。

片腕ながらフランケンはそれをばったばったとなぎ払い、ついに

出口を目前にする。

追従する者がいない事を確認して男を下ろし、彼は言った。

「奴らをこの敷地の外に出すわけにはいかん。

お前が脱出する間だけ防壁を上げるから外へ走れ。」

「…それって、あんたはどうなるんだ？」

少し躊躇いながらもフランケンハツキリと言った。

「俺はここに残る。」

それを聞いて表情が一変する男。

「は！？駄目じゃないか！

あんた一人残して自分だけ助かるなんて出来るわけがないだろ！」

「阿呆っ！そんなキレイ事言ってる場合か！！

…俺は人殺しの化け物で、元よりシャバに居場所なんざありゃしねえんだ！

さあ、行け！急がないと奴らが来ちまう！」

「っでも！」

「待ってる奴がいるんだろ！帰れなくていいのか！？

このまま化け物が世に放たれて、そいつに危険が迫っても良いってのかよ！？」

そこまで言っただけで急にトーンを落とすフランケン。

「それに、どうせ俺はもう死んでいるんだ。だから、お前は生きて命を大切にしろ。」

「…分かんねえよ。だって、あんたは今俺を助けてくれているじゃないか。」

それが、生きてることじゃあないのか？」

「…違う。俺の命はもうどこにも無い。ここにいるのはただの化物だ。」

頼むから、早く行け。」

フランケンの決意を変えられない事を悟った男は悔しそうに涙を流した。

「分かったよ。」

あの、…ありがとう。俺、あんたに会えて良かった。

あんたのこと一生忘れない。」

「ああ…。俺もお前に会えて良かったぜ。」

さ、もういいだろう。行け。」

男はこくりと頷いて出口へ走った。

そして、フランケンを背に走りながら空を指差しつつ叫んだ。

「フランケン！いつか空で会おう！そしたら、今度はあんたの話聞かせてくれよな！」

予想外の言葉に思わず笑うフランケン。

「ははっ、…あんまり早く来すぎるなよ！」

それに対して男は何か返事をしたようだったが、防壁が閉まり聞こえなかった。

だが、彼には男がなんと言ったか分かったような気がした。

男が去った後の防壁を見ながら彼はつぶやく。

「…行っただか。まったく、ロマンチストな野郎だ。」

「…クック、2人で逃げよう…か。結構、嬉しかったぜ。
例え、この施設から外へ出れば…即、ただの肉塊に変わっちゃう
この身でも、思わず夢を見ちまうくらいには、な。」

背後に化け物の気配を感じながら肩を回す。
もう、その表情に笑みは無い。

「さあて、化け物どもを片付けてまだ生きてるかもしれねえご主人様たちを助けないとな。」

俺はこの施設の従順なペット、フランケンなんだから…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188s/>

死地の親友

2011年5月23日15時47分発行